

祐
啟

၂၀ ၁၄ ၁၅

発行者
 社会福祉法人 佑啓会
 理事長 里見吉英
 〒290-0265
 千葉県市原市今富 1,110-1
 TEL 0436-36-7611
 FAX 0436-36-7612
 編集者 広報委員会


幕は開けども

里見吉英

トネルを抜けると真つ赤に咲き
乱れるツツジの花。山を見上げると
もさぞ大変なところなと思う。

新緑に垂れかかる藤の紫。足元は新芽が輝く芝生のじゅうたん。一歩足を踏み入れると、ピカピカの社会人一年生が先輩の後ろについて必死でもがいている。その隣でのもんぴりと寮生がマイペースで生活している。ある里学会が最も輝く時であり、私の一番好きな時季である。

何ともかも時間切れでスタートした自立支援活動だが、現場は愚痴つていいる暇などない。とにかく制度通りに請求しなければ施設はまわっていかない。その結果がどういふことになるのか等と考えている



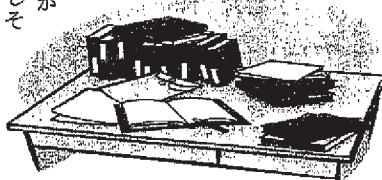

さて、今年は何んな一年になるの
だろうと毎年考えるが、最後に全く
予想もつかない展開になっている
というのがオープン以来十三年間
の歩みである。そんなことを想いな
がら事務所に入ると、はりつめた空
気が漂っており、現実を引き戻され
る。世の中「ゴールデンウィークで浮
かれている」というのに事務員さん
達が請求事務に追われている。今年
は出だしからちよつと違うなと思
っていたら質問が飛び交っている。
「この法人減免の処理はどうすれ
ばいいんですか」「この加算は」「
この上乗管理は」「それに答える
担当者も「ちよつと待ってよ。これ
でいいと思うけど市役所に確認し
てみるから」「この受給者証は間違
っていると思うんですけど」「これ
どれ、あめ違うなこれ。でもこれも

確認してみる」答える市役所の職員もさぞ大変だろうなと思う。

何もかも時間切れでスタートした自立支援法だが、現場は愚痴っている暇などない。とにかく制度通りに請求しなければ施設はまわっていない。その結果がどういふことになるのか等と考えている余裕はない。

ぼっんとひとりでお茶を飲み、職員室に行ってみると休みのはずの職員がなにやら忙しそうにしている。

「あれ、今日みんな休みじゃないの？」とつい口にしてしまってから、ああ失敗したと思った。支援員も利用者何日利用し、何回食事をし、何日帰ったのか、これまた皆ですり合わせているところだった。世の中、景気が回復し調子で行楽地は賑わいを見せているという時に、しかも、五月晴れ、野外で楽しむには絶好のチャンス。チェイション。女房・子供を家に




置き、独身者はアパートもせず薄暗い部屋にこもって仕事仕事とは何ともし難い。申し訳ない。

うらめしそうな視線を向けられ「エメン、ゴメン無理しないでよ」と言えうのが精一杯。

ところで、今回の法律は最初から変だった。あたかも障害者にとつて良い制度になると大言伝したところから変だつた。三年前の支援費制度移行時も同じだつた。「税金がないかから何とか皆さん知恵を出してください」と最初から正直に言うべきではない」とそれをあたかも「障害者のことを考えた法律ですよ」とときれい事を言ひながら結局のところ、利用者に負担をしいて、なお福祉施設もしめあげるといふ一段構えである。

これが営利企業であれば、消費者にも負担させるから企業もがまんしてくださいという論理が成り立つのだらうが、障害者福祉は根本から成り立ちが違ふ。特に知的障害者の場合は、その福祉を担つてきたのは当事者ではなく、その保護者と事業者である。本人がベターな生活を送るにはどうしたらよいか、当事者に代わつて訴えてきたのはまさにその人達を身近に取りまく保護者であり施設であつた。我々の先達は、私財を投げ、公的資金も頼りにならず種々な浄財に頼つて彼らを守つてきたという自負があるだらう。

それに比べれば今の福祉施設は恵まれてゐると言われればそうであるが、これだけの経済大国になつたの



我々にも反省点はある。この人達にとつて、施設福祉は絶対必要だといふおごりから、何故必要か、どこに使命があるのか客観的に検証し、広報してこなかったということ。また家族の方も一度入ってしまえばまさか施設利用ができなくなる等とは想いも及ばなかったことだろう。実際、今度も判定基準をそのまま適用すると入所利用者の八割は自宅に帰るなりグループホームに移るなり、とにかく五年間の猶予期間後は施設を利用できなくなる現実がある。このまま要綱通りに実施されればの話であるが。

グラントデザイン案が一昨年十月に示されて以来、一年半、まだに行政サイドと格闘してきたという感じであるが、その結果がこれでは、怒りよりも虚しさのほうが大きくなり、ちよつと投げやりの気分させられる。しかし、このままでは福祉の大幅な後退は避けられない、何とかしなければ。


全国知的障害者福祉協会でも、私の所属する政策委員会を中心に厚労省とのやりとりしてきた。今回明らかになった判定の基準や準拠については、予想以上に厳しいものと受け止め、下記のように知的障害の特性を反映させるように改善要望をする他、この問題を全国規模でアピールする予定である。

協会としてこのような運動を展開していくのは初めてだと思つた。それほど今回の法律は各方面に波紋を投げかけている。グラントデザインで舞台を設定し、シナリオに合わせながら舞台稽古では変更の連続であつた。未だに誰が主役なのか分らないままの稽古けとなつていく。

重苦しい空気の職員室を後にして、今年から整備の始まった里山へと足を運ぶと慣れない手つきで刈払い機を操り必死に竹狩をしている新任職員が集団があつた。この分野では誰にも負けないという某施設長がみんなに指示を飛ばして、みるみるうちにきれいにしていくなにしろ、やはりこれだな。

う・んこれだ。同じ格闘するのなら自然を相手にしたいものだ。

(理事長)



障害程度区分について

平成十八年五月九日

日本知的障害者福祉協会
正副会長・政策委員会

●当面の判定課題

○二次判定で、行動障害項目によら区分1〜4ランク上げるための指針を作ること。

○強度行動障害加算対象(二十点以上)は区分6、行動援護対象(十一点以上)は区分5に、二十点以上の中で区分2が十一%。

○IAD項目は、二次判定でも行うようにすること。(制限を設け)

○二次判定で療育手帳を参考にし



- 支援費の障害程度区分も参考にすること（指針を示す）
- 新判定基準の課題
 - 三障害統合は反対しないが、知的障害の障害程度を適正に反映する判定基準を。
 - 介護保険七十九項目を前提にしない。
 - 委員会に協会から委員を入れること。
 - 個人の心身の状態だけでなく、生活上の要支援度を計る基準に。
- 当面の行動課題
 - 厚生労働省（大臣・審議官）への要望、全国市町村へのアピール（知的二次判定）全国集会（六月上旬）
 - 当面の課題
 - ②新判定基準 議員・マスコミ対策 世論の喚起
 - 移行調査への対応

当面の判定課題と、新区分基準の方向について合意を得たら、協力する。
 - 六月中旬の中間集計により、見直しこと。平成十九年度予算が七日なので、この程度が限度。
 - グループホーム・ケアホーム区分に見直しと、報酬単価見直し（補正算？）
 - 当面の区分見直しの協会への要望書確約書

ふる里学会にて

はや六年

津留 由美子

ふる里学会から「佐啓」への原稿依頼を受けて何をどう書けばいいか日々悩んでいたところ、隣で新聞を眺めていた訓彦に「ねえー訓彦、ふる里学会にお世話になってから何年目だっけ」と尋ねたところ「六年目だよ」と彼は彼なりに日々の流れを意図（？）して話した。私の脳裏には改めて「六年か」と色々な出来事が蘇ってきた。

思い出せば六年前、養護学校を卒業して市外のある施設に通所がやと決まり、ホッとしたのも束の間二ヶ月目にある日突然、原因は今も分かりませんが引きこもり（登校拒否状態）になりました。それは朝と夜の生活が逆転して、毎朝起すことも起きず、大きな体を揺さぶることも逆切れするや、自分の体を傷つけるや、そして弟や私に手を上げる等、手の施しようがなく家の中は訓彦のことでギクシャクしていました。そこで、どうしたらよいのか施設の方に相談しましたが、解決への希望も少なく「大変ですね」と言う話で受けた私の印象は「仕方ありません、少ないスタッフで立ち上げたばかりの施設です。こういう障害者に対してはまだ、経験不足です」と言いたいような感じでした。市役所福祉課にも相談しましたが、休みが長引き施設から入所を断られた時は市役所としては援護できません。諦めるしかありません。との事で落胆しましたが、幾度となく相談を続けるうちに福祉課のS

さんからふる里学会を紹介して頂き、記憶によれば平成十二年九月二日の短期入所を経て通所が決まり、今日までお世話になっております。学会へ通所するようになってからは、徐々に落ち着きを取り戻してきて、入所間もないある日、学会からソフトボール大会に参加して、みているのがオファーがありました。本人はやる気満々で認められたので、投げる気満々で参加したのですが、投げ方やキャッチの仕方が思い通りに出来ず、仲間の機に信をなくして行くのはもう嫌だ！と行かなくなった時は、又来たか！と涙入りそうになりましたが、めげる訳には行かず職員の方に相談してみると「無理しないでやってみよう」との方針で、訓彦に接して頂いてどうにか立ち直り、通所を再開するようになったりしました。また、年始恒例の高滝市民マラソン大会に向けて頑張っていた様子でしたが、挫折して大会直前に棄権した事がありました。走る事が好きな私は訓彦を「高滝を一縮に走るから訓彦も走るとおだてて」



とどいて、正月明けに高滝のコースで練習を行いました。走るのが苦手な訓彦ですが、負けず嫌いなので私が先に走るのを見て白くないのではありません。むしろ、に走らうと無理をしていました。併走している主人が「疲れたら、歩いて、また走ればいいよ」となだめながら、走る区間、歩く区間を訓彦のテンポに合わせて目標を立てて完走しました。この完走が自信になったのか、学会の仲間や職員の方々

に支えられながら練習を積んで、コースを走り抜くことが出来るようになりました。大会本番では私を追い越して得意そうにはしゃいでいました。最近、しぜん工房に移ったことで、働いて工賃を頂く喜びを感じていくようです。また、休んだら工賃が減ると言うゲンギンな理由で休まなくなりました。やっぱりこの子にはゆつくりと時間をかけて独り立ちさせていくしかないのかと考えています。今頃張つてくれている訓彦があるのは、世間から認められたい気持ちがあるのと、認め育む環境があるからと感じています。障害者を見守っていくのは家族だけでなく、皆さんの力・コミュニケーションが最も必要だと思ふこの頃です。(津留訓彦)



「田舎者」

堀金 兼太郎

いつもと同じ時間、同じ車両に乗っていると、乗客の顔も大体は同じであることに気がきます。毎日、数十分の時間を共有しているけれど、お互い相手の素性も知らず、会話を交わすこともない顔見知り。電車通勤が決まったことを妻に告げた翌日、「満員電車に乗るときは両手を挙げて乗らないと痴漢に間違われるわよ、夜道を歩くときはオヤジ狩

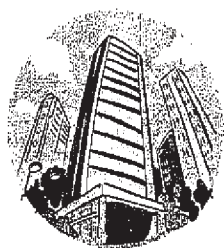
りに気をつけるのよ」とそんな歳か？、カバンを持つときはフアスナーを内側に向けるのよ」と、まるで海外旅行に送り出すような心配ぶりでした。都会に對する偏見というか、悪い部分がデフォルメされた妻の忠告を聞いては振りをして、聞き流す作業も骨が折れます。しかし私自身も偏見、というところ少し語弊があるかもしれませんが、この分野を生業にして十二年、まだまだ見識の狭さを痛感します。そもそも福祉の分野とは無縁のところから、ふる里学会に就職し、福祉施設というのとはちがうといえは郊外にあるのが当たり前のうか、仕方がないものだといふ意識が頭の片隅に常にあったような気がします。昔に比べれば障害を持つ人を街で見かける機会も多くなりましたが、施設はやはり山の中であつたり田園風景が似合っている、そこを利用する方々も、大自然に囲まれて伸び伸びと体を動かすことが良いのだなどと、勝手に思い込んでいたかもしれない。

ところが、転勤先の文京区大塚福祉作業所は、幾何学的に切り取られた小さな空の下、地下鉄の駅から歩いて二十秒、車の往来も激しい国道沿いにあります。「こんなところに」という気持ちもありました。そこを利用する方々は、自力で徒歩、交通機関を経て通ってきます。正直申し上げて、驚きました。「この人が・」という印象を持ったのも事実です。短いながらも今までの職場経験の中で出会った障害者お持ちの方々と比べて、決してここに通う方々は、障害の軽い方達ばかりでもないように感じます。現在に至るまでの保護者や、職員の方々の並々ならぬ支援の賜である事は想像に難くありません。しかし、確かにこの都会の中で当たり前のように暮らしているのです。新しい環境に身を置き、新しい人達に出会う事で、自分の視野が広がっていることを、日々感じていきます。目がウロコが落ちつばなしです。ウロコが落ちすぎたのか、体重も減り、地下鉄の階段も身軽に登れるようになりました。(人)には、通勤が大変で疲れたのでは？と心配を頂く事もあります。しかし、我々を受け入れてくれた利用者の方々からすれば、迷惑に思われる側面もあつたと思います。今までの当たり前の環境に、突如としてやって来た人間は所在無く、オロオロ・キョロキョロとして、さぞやもどかしさを感じていたことでしょう。ましてや利用者の方々の平均年齢は当年とって三十四歳の私よりも上ですから、頼りなげに見えるのかも知れません。そんな生活も一月からの並行運営を経て、はや四ヵ月。今では利用者の方々から気兼ねなく、お叱りの言葉を頂けるようになりました。これも馴染んできた証拠かな？などと、自分なりに嬉しく思っています。満員電車から吐き出されるように降りて、どことなく誰かが助けたというのに疲れているような通勤風景



ふと地下鉄のホームのベンチに作業所の利用者を見かけます。彼らはそんな殺伐とした空気にはお構いなしに、誰に向けるでもなく楽しげに話をしています。そんな光景を目にすると、都会は住みづらいとか、自然に囲まれるのが良いなどというのはいまだに狭量な私見であつたのだなと思ひます。どんな空の下でも、交わらぬ彼らは実は一番たくましく、そんな元気をもらいに、毎日通っています。

(大塚福祉作業所支援員)



編集後記

未だ不安が残る新法の事務請求と未完成の佐啓を一時忘れて、先日、鴨川グランドホテルの新人歓迎会に参加しました。新任職員三十五名を含む総勢百十二名。ふる里学会最大級のこの宴で、十二年目を迎えた自分には無い、若さ故の感性とさわやかさに触れながら、時間も忘れ、私も忘れ・・・。「酒の席だけ元気だねエ！」だなんて言われないよう、日々、自分に厳しく、明るく、元気よく・・・。

佐啓五十七号をお届けします。

宮崎理